

明治の廃藩置県や、  
太平洋戦争の大空襲も永らえ、  
激動の世をくぐり抜けてきた  
幸運な桜

## 蜂須賀桜(徳島県)

いまはなき徳島城御殿で  
殿様に愛されて

蜂須賀桜は、江戸時代に徳島城御殿(今は城跡のみ)に植えられていて、藩主の蜂須賀家の殿様に大切にされてきた。一説には殿様が「お留石」にとどまつて桜を観賞したので「おとめざくら」と呼ばれてきたとか。

現在、それを守り育て広める活動をしている「蜂須賀桜と武家屋敷の会」によると、「元東京農業大学教授で昭和天皇のサクラ研究の相談役を務めら

れた染郷正孝先生に調査していただいた結果、カンヒザクラとヤマザクラの雑種であるカンザクラの系統であることが判明しました」とのこと。毎年2月中旬頃から開花する早咲きで、濃いピンク色の可憐な花が1ヶ月ほど長く続くとが特徴だ。蜂須賀家とかがわりが深いことから「蜂須賀桜」と命名され、商標登録もされている。



伝説の桜に逢いに行く。





## 明治の廃藩置県で 殿様から原田家へ

明治維新期の1871(明治4)年、明治政府は廃藩置県を断行し、失職した旧藩主らに東京に移住するよう命じた。そのため徳島藩最後の藩主・蜂須賀茂詔公は藩士の原田一平に、この桜を自分の屋敷に移植して守り育てるよう託した。このとき、他の多くの重臣たちも解雇されて仕方なく徳島を離れる中、原田氏ならずと徳島にとどまると見込んで、茂詔公はこの桜を預けたのだらうといわれている。

1869(明治2)年に版籍奉還で廃城となった徳島城はその後、1875(明治8)年には城内の建物が破壊されたというから、この桜を大切に愛してきた茂詔公の判断は正しかったわけだ。原田一平はその後、城下にあった邸宅や門を東御殿庭園(現在の徳島県庁付近)の樹木や庭石とともに当時の金で2000円という巨費を投じ、10年の歳月を費やして、今の場所に1882(明治15)年に移築復元した。蜂須賀桜はこうして原田家の屋敷で守り育てられていく。

## 徳島大空襲でも 奇跡的に焼け残る

やがて20世紀に入ると、日本は悲惨な戦争へと突き進んでいく。太平洋戦争の終戦間近の1945(昭和20)年7月4日、100機以上におよぶ米軍のB29爆撃機が徳島市を襲い、市街地の7割が焼け野原に。死者約1000人、負傷者約2000人、被災者は7万人に達した。

この地獄のような大空襲でも原田家を含むわずかな一帯は焼け残り、蜂須賀桜も生き延びる。終戦後、アメリカの進駐軍が徳島市に入ってきたときは、奇跡的に焼け残った原田家の屋敷が本部に使われたそうだ。

今も原田家の庭に生き続ける蜂須賀桜の木は、樹齢約250年。ということは、18世紀から日本の激動の歴史を見続けてきた、貴重な生き証人といえるだろう。



伝説の桜に逢いに行く。

